



令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果より

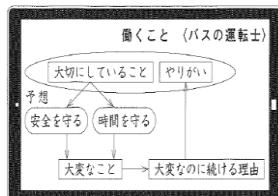
4月17日に6年生で実施しました「令和7年度全国学力・学習状況調査」について本校6年生の結果をお伝えします。

総合結果(国語、算数、理科)

今年度は、国語、算数に加えて理科も実施されました。3教科とも全国平均を上回る結果となりました。学習指導用要領の内容別で見てみると国語、算数では「知識・技能」よりも「思考・判断・表現」の正答率が全国平均との差が大きく、理科では「知識・技能」「思考・判断・表現」共に正答率が全国平均との差が大きかったです。問題形式別(選択式・短答式・記述式)で比較すると3教科とも記述式の正答率が全国平均よりも高く、特に国語、算数では6%~10%以上高いという特徴が見られました。

国語の結果より

問題形式別で見てみると、記述式問題の正答率が全国平均を大きく上回りました。学習内容別では「情報の扱い方に関する問題」で正答率が低かったので分析してみました。「情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかを見る」問題です。正答率60.4%でした。インタビューで質問することについて話し合った内容を図で表した【話し合いの記録】(右図)と【話し合いの様子】を読み取って、その図を説明した文を4つの選択肢から選ぶというものでした。「質問する内容を短い言葉で書き、線でつなぐことで質問を一つにしぼつている」と誤回答した児童が20.8%で、一見正答のように見えますが、アンダーラインの部分が違っています。正答は「質問する内容を四角で囲み、線でつなぐことでインタビューの流れを整理している。」です。問題文の中にある【話し合いの様子】の文章も正確に読み取り、問題文と図の2つの情報を使って、選択肢から読み取れる要素を1つずつ確認しなければ正答できない問題でした。



算数の結果より

ほぼ正答率が全国平均を上回っていますが、正答率が全国平均を大きく下回った問題を詳しく見ていきます。10%増量したつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選ぶ問題です。「10%増量」の意味を正確に解釈することが必要で、問題文にはイラストが入った関係図(右図)がついておりイメージをもちやすくなっています。「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを「増量前の量」を1として、「10%増量」の10%を0.1と表し1.1を導き出すものです。普段の授業でも関係図を用いた題意を理解し数式に当てはめ説明する場面が多いのですが、今回の調査では苦手とする児童が多くいました。また、問題文が長く全ての題意を正確に理解できなかったことも要因と考えます。



理科の結果より

ほぼ全国平均を上回っていますが、正答率が2割に満たない問題がありました。身の回りにある金属が、電気を通す物、磁石に引き付けられる物かという知識を身につけているかを問う問題です。これは3年生で学習した内容ですが、知識が定着していないということはその知識を生活に生かすことがないのではないかと考えます。学習したことを普段の生活の中で活用するためには、様々な生活経験ができる環境が必要になると考えます。

児童質問紙調査より

- 「自分には、よいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」「人が困っているときは、進んで助けていますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」「人の役に立つ人になりたいと思いますか」「学校に行くのは楽しいと思いますか」といった設問に「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と肯定的な回答をした児童の割合は全国平均より大幅に高く、よい結果でした。自己肯定感、規範意識、自己有用感を育む取組、行くのが楽しい学校づくりの取組に引き続き取り組んでいきたいと考えます。
- 「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることができますか(習い事は除く)」の設問では「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答している本校の児童の割合は全国平均より高く、児童は地域から見守られ、地域の方々の関わりの中で育まれているという意識が高く、さらに地域や社会に対しての関心が高いことが分かります。引き続き、学校と地域や社会とがつながる機会を大切にしていきたいと考えます。
- 「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の設問では、肯定的な回答の割合が全国平均よりも多かったですが、一定数困ったことを相談することに躊躇することがあると捉えられる児童がいることは心配なことです。困りごとがあれば相談にのれる環境や雰囲気づくりは私たち大人の大きな役割です。引き続き日々の丁寧な児童観察、声掛け、定期的な教育相談の実施など児童理解に取り組んでいきます。